

先月発表された上記の論文では閉経後 5 年未満の HRT を受けた女性では、卵巣癌リスクが 40% 上昇することが示唆されています。リスク上昇率は統計学的に有意ではありますが、リスクそのものは小さく、50 歳で 5 年間 HRT を受けた場合、卵巣癌の診断は 1000 人に 1 人、卵巣癌による死亡は 1,700 人に 1 人増加するという内容です。

この研究は 21,000 人を超える卵巣癌患者を対象とする 52 本の疫学論文のメタ分析で、約半数が HRT を受けていて、そのリスク上昇は米国と欧州において差はありませんでした。前方視的研究では HRT を現在使用している群(5 年未満)では RR 1.43、5 年以上使用している群では RR 1.41 であり、HRT 使用を止めていても一定の期間卵巣がんリスクが残る (RR 1.10 ~1.29) という点が骨子です。EP 併用療法と E 単独療法の間での差はなく、また前向き研究で HRT によりリスク上昇が認められた組織型は、漿液性腺癌(RR 1.53)および類内膜癌(RR 1.42)であり、一方、粘液性腺癌ではむしろリスクの低下傾向が見られました(RR 0.93)。さらに HRT の投与量、投与ルート、さらに P の周期投与ないしは連続投与といった投与方法との相関は見られていません。また今回の研究からは、HRT と卵巣癌との間の因果関係および発症機序は不明であり、何らかの関係があるかもしれないという結論でした。

国際閉経学会(IMS)および北米閉経学会(NAMS)からはこの論文に対して以下のようなコメントが出されています。

-----

今回の研究に組み込まれていない WHI 報告では 5 年以上の HRT 使用によって卵巣癌のリスク上昇は示されておらず、一方、今回の結果に含まれる prospective 調査としては MWS および DahoRS の 2 論文による影響が大きくなっています。また卵巣癌の相対危険度としてもすべて 1.6 以下と非常に低く示されています。さらに 1 通含まれる後方視的調査として使われている論文は、その後の報告で卵巣癌のリスク上昇はなかったと変更されています。このような点から本論文の調査対象となった患者や論文には偏りがあり、その結果はメタ分析として懐疑的です。

-----

日本における卵巣癌の年齢調整罹患率は 9.0/100,000 (2010 年)すなわち約 1 万人に 1 人の発症である (国立がん研究センターがん対策情報センター) ことから、卵巣癌自体の発生頻度が極めて低いことが知られています。一方、今回のような HRT と卵巣癌発生頻度の上昇は欧米からの報告はありますが、本邦におけるリスク変化については未だ明らかとはなっておらず、今後の検討が必要です。

繰り返しになりますが、今回の報告では HRT と卵巣癌発生との因果関係は明らかとなっておらず、また増加する卵巣癌のリスクとしても、絶対的リスクは非常にわずかです。HRT にはメリット・デメリットが存在することはよく知られており、本学会としてもこの論文は更年期症状のために HRT を行っている女性の治療を中断しなくてはならないほどの重大な報告ではないと考えていますが、リスクは低いものの治療として HRT を選択する場合にはこのような報告があったことを御考慮ください。